

古来より崎津では漁業を、今富では農林業を産業としており、狭隘な土地に集落が形成されたためか、そのほとんどが集落特性に応じた生業以外には行なわれなかった。そこで崎津からは豊富な海産物が、今富からは農・林産物や石炭などが往来するなど、両集落は互いに依存しあうことで生活基盤をたてた。集落内には、明治後期当集落の隣町にある大江教会に赴任していたガルニエ神父が崎津教会を兼任する際、布教活動を行うため往復した「神父道」と呼ばれる峠道がある。



▲崎津・今富の生業



信仰と習俗～目に見えない要素～

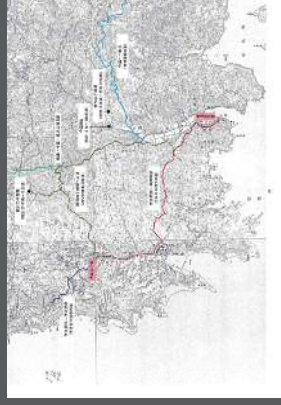
崎津・今富の文化的景観を形成する要素の中には、目に見えない要素である信仰や民俗も関係している。雷津は16世紀後葉以降、アルメイダ修道士によるキリスト教の布教から、現在まで複数の信仰が共存し続けている地域である。

崎津

崎津のキリシタン時代の記録は少ないが、現在の崎津教会の地には吉田庄屋があったと伝え、禁教下における「絵踏み」が行われた地として地誌類に記録が見える。

また、地域に残る信仰対象となった聖遺物にはアワビやタイラギ貝など海に関するものが多いことも特徴のひとつである。両集落ともに水方を中心とした組織を作り、仏教儀礼や年中行事などにキリシタン信仰を反映しながら、潜伏キリシタンとして信仰を継続していた。

崎津では禁教下の潜伏から、仏教への転宗、その後の教会への復活という歴史を有している。禁教下において、仏教や神道へ転宗していた崎津の信者は、潜伏キリシタンとして信仰を継続する。明治期のキリスト教解禁以降、現在の崎津諏訪神社横に教会が建てられ信者も教会に帰放する。このようにキリスト教復活と共に潜伏としての信仰は途絶え、今日まで複数の信仰が共存している地域である。



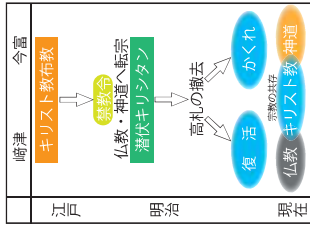
▲流通往来の道

九州大学に所蔵されている「天草嶋崎津港近郷海浜要図」にはこの神父道を大江道と記しており、「天草郡公料私領領主御支配交代年曆鑑」には、こうした村々を繋ぐ道が描かれている。

崎津の「メゴイナイ」と呼ばれる行商はこうした峠道を利用し、崎津⇨今富を中心し崎津⇨今富⇨一町田、雷津⇨大江、雷津⇨本渡、雷津⇨苓北に至るまで生活物資を運搬した。これらの道では生業だけでなく文物交流も行われ、崎津は中世以来の海路、今富は陸路における交通の要衝であった。



▲神父道から見た崎津・今富集落



▲隠しメタイ

▲旧木蓮教会

▲信仰対象となった鯛や貝類



▲吉田共同墓地

▲不空聖観音坐像



▲今富の聖遺物と年中行事

今富

対する今富ではキリスト教や神道、仏教などの宗教的要素と山岳修験などが土着することで形成した民俗的要素が共存しあうことで文化的景観の見えない要素を形成してきた。禁教令以前はキリスト教を信仰していたが、禁教下においては仏教や神道に転宗する一方、潜伏キリシタンとして信仰を継続した。しかしキリスト教解禁以降、復活するものはほとんどおらず、かくれキリシタンとして信仰を継続したため、表面上ではキリスト教は衰退の一途をたどる。

文化2年（1805）の天草崩れでは潜伏キリシタンの一斉検挙により、信仰内容や代表者信者数、信仰対象地など文献に記録され²、当時の様相を伺うことが出来る。集落を取り巻く後背山には、聖水汲み場をはじめ、天草崩れで取り壊されたところある「弓取りの墓」や「ウマンテラサマ」といった墓地や信仰地が集落とセット関係で配置されており、聖遺物として鏡や木彫仏、土人形、石仏を再加工したキリシタン遺物が残り、地域の歴史や特色を色濃く反映している。

解禁後、復活せずにかくれの道を選んだ今富集落は、仏教や神道を継続したため、キリスト教は途絶えたが、年中行事を行う際には、キリシタンの要素を含む装飾をするなど「かくれ」信仰が根付いた地域であり、今日までその痕跡を見ることが出来る。